

大塚本陣

郷土史家 西 羽 晃

前回に書きましたが、参勤交代制が出来てから、本陣・脇本陣も出来ました。本陣とは高貴な身分の人が休泊する宿です。利用できるのは、幕府の役人、大名、公卿、大寺社の僧侶・神官などです。本陣の当主は大名クラスを迎えて挨拶に出ますから苗字を許されていきました。脇本陣は上記の身分の次のクラスの人です。例えば大名の家老です。空いておれば、一般人も利用できましたが、かなりの金持ちでないと無理でした。松坂の豪商である三井家の当主は脇本陣・駿河屋（今の料理屋・山月のところ）に泊まっています。脇本陣家は苗字を許されず、屋号で呼んでいました。

桑名宿には大塚与六郎家と丹羽善九右衛門家と2軒の本陣が代々世襲であったようです。大塚本陣は船馬町（今の船津屋のところ）、丹羽本陣は川口町（今の川市付近）にありました。幕末の天保（1830～44年）ころの大塚本陣は建坪およそ221坪、丹羽本陣はおよそ204坪でした。そのころには脇本陣が4軒ありました。うち駿河屋はおよそ109坪です。

大塚本陣が何時ごろ始まったのかは定かではありませんが、大塚与六郎が文献で出てくるのは寛永12（1635）年に美濃国安八郡楡俣村（現・岐阜市）の年貢米を江戸へ運送することに携わり、その運賃を受け取っています。当時の大塚与六郎は桑名宿の船年寄を兼ねていました。同じ頃に参勤交代制が始まっていますから、その時から大塚与六郎は本陣を勤めたかと思われれます。初代大塚与六郎は万治元（1658）年に亡くなっているようです。

幕末の大塚与一右衛門範之は明治2（1869）年9月27日に亡くなっていますが、彼が当主の時の明治元年と2年には明治天皇が大塚本陣に3度休泊しています。

範之の長男は嘉永3（1850）年生まれ、相続してからは単に大塚与六

郎（号・蘇水）と名乗っています。彼は慶応義塾に学んだ開明的な人で、明治初年に桑名で英語塾を開いたようです。これからの近代化の中で本陣も不要となるので、明治8年には本陣の建物を岩間久七へ売却しました。岩間家は「船津屋」という料理旅館を始めましたが、本陣形式では不便なため、中心部の「上段の間」部分を川北村（現・四日市市）の法従寺に売却しました。現在でも法従寺で客間として使われています。

大塚家は明治天皇が休泊されたことを誇りに思い、その時の宿帳を大切にしていたのですが、名古屋に住んでいる昭和20（1945）年に日用品を疎開させ、次は宿帳を疎開させるべく準備していたのに空襲で焼かれてしまいました。大塚与六郎家の墓は仏眼院にあります。



仏眼院にある大塚家の墓